

波乱のゴールデンウィーク

中村 アキヤ

日本では新緑薫る連休の真っ最中なのに、冷酷な部下を持ったN部長は、何の因果か仕事でヨーロッパを転々と移動することになった。

最初の訪問地はロンドン。前夜到着したばかりで、まんじりともしないうちに夜が明け、ボケた頭のままS社を訪れた。ミーティングの冒頭、先方のC氏が薄くなった髪を撫でつけながら気の毒そうにこう言った。

「Nさん、今日午後の便でケルンに行くんだらう？ 生憎ドイツでは今日で一週間も官公労のストが続いているんだ。今日あたりは空港も閉鎖になるかもしれないと今朝のテレビで言っていたので、今秘書に確認させているよ」

ヨーロッパの第一日からこんな調子である。Nにとってはもともとこの出張は気が乗らなかつた。日本にいたからって、この五月の連休に特に予定がある訳ではなかつたが、家でのんびりするのも良し、気の置けない誰かとゴルフをするのも良し、溜まった本を読むのも良し、とにかく休日が続くという事はサラリーマンにとっては本当にありがたいことなのである。ご他聞にもれずNもこの連休を心待ちにしていた。

ところが四月の中旬、就業時間の終わり近くの丸の内オフィスで、

「部長、連休中は日本にいてもしょうがないでしょうから、ちよつとヨーロッパで仕事をして来て下さませんか？」とK課長が薄ら笑いを浮かべてすり寄ってきたのである。

「いや、どうせ行くなら連休明けがいいよ。それに連休中のフライトは一杯だし、この仕事は君の担当だから君が行くのが当然だらう？」と逃げたものの、「でも、一日でも急ぐのです。フライトはもう予約してあります。訪問先はロンドン、ケルン、マドリッド。帰国便はアムステルダムからです。それにこれらは重要案件ですから部長にお願いしたいのです」と強引に押し切られてしまったのである。

「自分には小さな子供がいて連休中は家族サービスの約束があるが、部長は大きい息子さんからは相手にされず、連休だからといってご家族となにかする予定もないんでしょう？」

と言いたげなK課長の思惑はいかに鈍いNも十分読み取れた。

小心な上司は、楽しみにしていた連休を棒に振って、重い荷物と共に当地に着いた翌日からこの始末なのである。

「Nさん、やはり殆どの空港はクローズだ。フランクフルト、ケルン、デュッセルドルフ、みんな駄目だ。よかったらベルギーのブラッセルまで飛んで、そこから汽車かバスでケルンまで行ってみるか？」

ドイツでは珍しく第二次大戦後最大規模の公務員ストが続き、九日目になっても解決の目途はついていなかった。

国鉄をはじめ公営の交通機関は機能麻痺に陥り、都会ではゴミの収集が滞り、一部では停電もあった由。

空港の職員は今回のストには参加していなかったが、消防署員がストに参加したため、ドイツ西部の各空港は、万一の事故発生の際の消火活動ができなくなることを懸念していた。非常の際は消防の代わりに軍隊の派遣を要請したところもあったが、軍には断られ、結局主要空港は軒並み閉鎖を余儀なくされていたのだ。

「いや、たとえ何らかの方法でドイツに入国できても、ストが終わるまで出国できないと困るから、今回のドイツ行はキャンセルすることにするよ」とN。

「それではドイツに電話してみたら？」とC氏。

朝の十時にS社に着いて一時間ほどのこんなやりとりの結果、ようやく事情が判明しNは、早速ケルンのB社に電話を入れた。

公衆電話のボックスから国際電話を掛けるのは大変だが、会社のオフィスからは先方につながるまで秘書嬢がやってくれるので簡単である。

ところが呼び出し音は聞こえるのだが、いっこうに相手が出ない。二、三回かけ直して貰っているうちにC氏がやつと気が付いた。

「ああ、ドイツは今昼休みだ。大陸はサマータイムで、こことは時差が一時間あるんだよ。でも彼らは食事に出たら二時間は帰ってこないよ。オフィスに戻っても、しこたまワインを飲んでいるから話がなかなか通じないぞ。さて、我々も食事に行こう。電話はそのあとのほうがいいよ」

「Nさんか？ よく電話してくれたな。こちらは空港がどこも閉鎖で、君に連絡しようにも方法が無くて困っていたんだ。東京にも電話を入れたんだが、ゴ

ールデンウィークとかで君のオフィスも誰もでないんだ。今回のミーティングはキャンセルするって？ うーん残念だなあ。今晚のために素敵なレストランを予約したんだが……。今度来るときは絶対ストがないことを保証するよ。なんでも保証できるかって？ なにしる今度のストは十八年ぶりなんだよ。だから次回へのストは十八年後になる確率が高いんだ。

ところで何処から電話してくれたんだい？ ロンドン？ もう昼飯は済ませたかい？ イギリスでは旨い昼飯にはありつけないだろうな」

そんなことはどうでもいい。これからNはどうすればいいのか考えなければならぬ。会社の出張で来たのに、ストのお蔭で二日間の予定が無くなってしまったのだ。少なくとも二日分のヒルメシだかヨルメシを誰かに奢ってもらうチャンスは無くなったのだ。

今夜は何処に泊まるうか、そして明日はなにをやればいいのか？ そうだ、とりあえず今日の午後のケルン行き飛行機をキャンセルして、明後日のマドリッドへ行く便を確保せねば。

この事態を東京の本社に連絡しようか、待てよ日本は連休中だし、家の女房に連絡したところで「あらそう？ 暇になってよかったわねえ」とどぼけた返事が返ってくるのが関の山、電話するだけ無駄ってものだ。

Nは短時間のうちにいろんなことを考えてみた。取りあえず会社のロンドン事務所に実情を報告しよう。もしかしたら暇な駐在員が明日ゴルフにつれていつてくれるかもしれない、とNは淡い期待をもってダイヤルを回した。

「ハロー、Nさん？ こちらの駐在員は二人ともドイツに出張中で私一人が留守番なのよ。彼らはストのためにどうしたらロンドンに帰れるか、鉄道やバスの便をさがしている最中なの。貴方はラッキーよ。こんな目に合わずに済んだのですもの。私に出来ることがあったら何でもお手伝いします。遠慮せずにごうぞ」と陽気な秘書の声。なにがラッキーかとNは言いたかったが、自分でマネージするからと受話器を置いた。

Nはとりあえず今朝チェックアウトしたホテルにもどった。タクシーまで荷物を運んでくれたコンセルジュが二重顎をゆすりながら、

「おや、ドイツに行くのではなかったのかい？ それとも忘れ物ですか？」と聞いて来る。

部屋に荷物を置き飛行機のチケットをチェックする。今回のヨーロッパ行では珍しく全日空の便を利用した。同社はたまたまこの時期にキャンペーンを実施中で、ヨーロッパ便に乗るとロンドンのホテルが宿泊無料になること、空港からホテルまで無料のリムジンが出るというのが、今回の出張のアレンジをしたK課長の言い分だった。

チケットの書き換えは一連の通し切符を発行した会社で行う必要がある。さて、ロンドンの全日空の事務所は何処にあるのだろうか？ 同社がヨーロッパ線を開いたのはそんな昔ではないので、普通のロンドンの地図を調べても見つかる可能性は少ない。

Nはガイドブックを広げ、日本航空の事務所の電話番号を調べて電話した。

「もしもし、まことに済みませんが、お宅の競争相手の全日空のロンドン支店の電話番号を教えてくださいませんか？」

愛想よくすぐに教えてくれた日航の電話嬢に感謝しよう。

全日空のお店はファッションで有名なボンドストリートのほぼ中央、ロンドン高島屋の隣にあった。

「お待たせしました。ドイツ行きのおよびドイツ発の便はいずれもキャンセルいたしました。明後日以降マドリッド発からの便はいずれも有効です。マドリッドまでの便の予約はいかがでしょうか？」

洒落た眼鏡の女子職員が手際よく応対してくれる。

「セヴィリア行きの便はとれますか？」とこの時まで思ってもみなかった地名が自分の口から出たことに、N自身がびっくりした。

明後日にマドリッドでミーティングがあることは事実だが、明日はいちにちロンドンでゆっくりしてもよかったのだ。ロンドンの町は過去十回ちかくの滞在のうちに充分観光したし、有名な大英博物館やトラファルガーの国立美術館、ロンドンタワーなどは他人を案内したことも数回あり、それらの素晴らしさは堪能しつくしている。

ロンドン郊外のバスとかカンタベリーへ出かけるか、ちょっと脚をのばしてエジンバラなどへ出向くのも悪い考えではなかった。でもとっさにセヴィリアの地名が浮かんだのはいくつもの理由があった。

Nはスペインが好きだった。この数年ほどNHKテレビのスペイン語教室の熱心な生徒で、多少はスペイン語を喋れるようになっていた。スペインが好きな理由の第一は、とにかく食事が旨いこと。第二にホテルが安いこと、第三に、これが最大の理由であるが、美女（ボニータ）が多いことであった。

それにセヴィリアはとても綺麗な町と聞いていたし、万国博覧会も開催中で、翌日のマドリッドへの移動も便利なことも、当地を選んだ理由だった。

とにかく明日以降の便をロンドン→セヴィリア→マドリッドに変更してもらい、その夜はアルコールを控えめにして早めに就寝した。

翌朝、Nは改めてチケットを確かめた。今日の便はロンドンの四つの空港のうちのひとつ、ガトウィック空港からである。一番大きいヒースロー空港と二番目のガトウィック空港が国際便を受け持ち、他の二つはローカル線とか特別なチャーター便や個人所有機の発着用なのだ。

ホテルから歩いて二、三分でグリーンパークの駅。恐ろしく長いエスカレーターで地下深く下降し、そこから地下鉄でヴィクトリア駅まで九分。ヴィクトリア駅からガトウィック行のノンストップ急行に乗り込む。

車中で買った熱いコーヒーをすすりながらガトウィックからの出発便をチェックしたが、これから乗る筈のジブラルタル航空なんて聞いたことのない航空会社は、どのページにも載っていない。変だなあ、でも全日空で予約してもらったのだから大丈夫、と自らを励ます。

そういえば昨日、全日空のお姉さんは通常ならコンピューターを通して行っ便の予約を、応答が遅いからと言って、直接その会社に電話して予約してくれたのだから、その航空会社も実在するし、ガトウィックから発つのも間違いはないのだ。絶対に！

ガトウィック空港の建物は汽車の駅に直接つながっている、というより駅の改札を出たロビーがそのまま空港の出発ロビーなのである。朝の八時というのにおびたらしい人たちが大きな荷物を運び、発着表示ボードを見上げ、コーヒーを飲み、うろつきまわり、子供の手をひき、大声で話し合っている。

Nはまずジブラルタル航空のカウンターを探して、広い人混みのロビーを一巡する。壁に貼られた発着スケジュールの細かい表をつぶさに調べ上げる。念のためもう一度発着ボードを声を出して読む。が、どこにもそんな航空会社も、出発便も出ていない。いやな予感。

「落ちついて」とNは自分自身にいきかせる。ああ、ここは到着便のロビーだ。慌てて隣接する出発便のロビーに急いだ。だがそこでも状況は全く変わらなかった。なんの手がかりも得られぬまま出発時間だけが確実に近づいてくるのが気がかりであった。

「インフォメーション」の表示のある窓口に二十人ほどの人が並んでいる。だが早朝の故か係員のいる気配はない。近づく、

「この窓口は九時に開きます。緊急に用のある方は内線999番に電話するよう」に書いてある。並んでいる人たちはその電話の順番をイライラしながら待っているのだ。

そこで、Nは近くのBA（ブリテイッシュ・エアウェイ）のカウンターでジブラルタルエアはどこから乗るのか聞いてみた。

「ジブラルタルエアはノースウイングから出ます。ここはサウスウイングです」

「えっ、そのノースウイングはどう行けばいいの？」

「この廊下の先のプラットホームから汽車（train）に乗って下さい」

まさかまた汽車に乗るとは思ってもみなかったが、示されたプラットホームには三両編成の瀟洒な電車が待っていた。ガランとした車内には座席が無く、Nが乗り込むと直ぐに発車し、七、八分でノースウイングに到着した。

そこには二十ほどのカウンターがあったが、ジブラルタルエアのそれは期待に反して見つからなかった。

出発便を知らせるボードにもテレビモニターにも、二十分後に飛立つはずのお目当ての便は載っていなかった。

「セヴィリアなんかに行こうなんて詰まらないことを考えなければ良かった」と弱気の虫が頭を持ち上げる。途方に暮れて思わず「ウーン」と唸って立ち止まった瞬間、

「何をお探しですか？」

と白地に赤と青のストライプの、BAの制服のおばさんが声をかけてくれた。

「ジブラルタルエアのカウンターは貴方の目の前にあります」と、にこやかに教えてくれる。何のことはない。目前のBAのカウンターで手続きを代行しているという。それにしても手続き代行の表示があっても良さそうなのに、と文

句をいうよりは、やれ嬉しやの気持ちは何倍か大きかったのは事実であった。

セヴィリア、それはアンダルシアの首都グラナダの真西に位置する、この地方最大の町、オペラ「セヴィリアの理髪師」「カルメン」で誰にもその名を知られている都市だ。

スペインで最大、キリスト教世界の中でも三番目の豪壮さを誇る大聖堂、ヒエルダの塔、アルカサールの宮殿、サンタ・クルス地区の白壁の住宅街と、美しいパテイオなど、市内を流れるグアダルキビル河の左岸には中世の回教文化を色濃く残した詩情溢れる建物が軒を連ねている。

一方、右岸には、万国博覧会がオープンしたばかりで、最新の技術と先鋭的な感覚をふんだんに盛り込んだ、各国のパビリオンが妍を競いつつある。

タイミング良く、当地に来ることが出来たのは本当に幸せだとNは思った。

空港で予約したホテルは万博目当てに建設されたものらしく、大きくそして豪華であったが、お値段のほうも万博価格で、地方にしては法外な一泊四万円近いものであった。Nは荷物を預けて市内観光に出かけた。

五月と云うのに気温は三十度を超え、真夏には四十五度にも達するという南国の風情に、アラブ文化の象徴である繊細なモザイク紋様の建物に眼を見張り、路地奥の花に囲まれた野外テールで、ビールを飲みながらフラメンコの独特の節回しの歌を聴いた時に、Nはしみじみと異国に来たことを実感した。

市内観光を終えてホテルへとタクシーを捕まえたが、乗った途端にホテルの名前を覚えていないことに気が付いた。ホテルの名前を書いた紙切れは空港からのタクシーの運転手に渡してしまったし、チェックインの際ホテルで貰ったカードは部屋に置いてきてしまったのだ。

「どちらのホテルですか？」と聞かれて、

「プエス（えーと）」とか

「グランデ（大きい）、オテルブランコ（白いホテル）」とか、

「ヌエボ（新しい）、セルカ デ リオ（川の近く）」とか、とにかくヒントになりそうな単語を列挙したらその運転手は笑い出して、

「セニョール、それはホテル アル アンダルスだ」と教えてくれた。

なんとかホテルに辿り着き、Nは部屋でひと休みした。夕方の五時というの

に太陽は沈む気配は全くない。

八時頃になってようやく薄暗くなってきたので、ホテルのレストランを覗いてみるが、まだ準備中でテーブルの上に椅子が逆さに乗せてある。仕方なく隣のバーで一杯飲みながら開くの待った。いつまで待っても開く気配がなく、とりあえず一杯のつもりアルコールが二杯になりそして三杯になった。九時半になってやっとオープンしたレストランに颯爽と繰り込んだが、Nがその夜の最初の、それも断然早い客であった。

六、七人の白い詰襟のボーイが、蝶ネクタイ、ブラックスーツのマスターに率いられて挨拶に来る。Nは分厚いメニューを広げて、リオハの赤ワインを選び、オードブルに鰻の稚魚のオリーブオイル揚げ (anguilles fritos) を頼み、そしてにんにくスープ (sopa de ajo) とメインにラムステーキ、最後にデザートを頼んだ。三十人は収容できる豪華なダイニングルームは、いまやN一人の貸切りである。Nは背筋を伸ばして無理に威厳を保ち、おもむろに赤ワインを味わい、味の良い鰻の稚魚のオイル揚げ、小海老のから揚げとハムのオードブルをつまむ。にんにくの効いたスープを味わう。

その間、絶え間なくボーイの一人がワインを注ぎ、二人目が皿を取り換え、三人目はこぼれたパン屑をかき集め、四人目はナイフとフォークを整える。

別なボーイはメインディッシュのラムステーキを客の面前で焼き上げるべく、移動式の小テーブルに材料一式とガスレンジを乗せて、ブラックスーツとシズシズと近寄ってくる。

自分の担当を無事にやり終えたボーイ達はナプキンを左の腕に掛けて客の両側に整列し、息をひそめて客の一挙手一投足を観察し、客に隙さえあればさかさず進みでてワインを注ぎ、皿を取り換え、パン屑をかき集め、ナイフとフォークを正しい位置に並べ替えるのである。

大体レストランで一人きりで食事をするというのはどんな場合でも落ち着かないものだ。まして広い食堂にただ一人、大勢のボーイに囲まれての食事は間が持てないこと夥しい。

「これは旨い」などとブツブツ独り言を言いながら食べるのも気持ち悪いし、といって黙りこくってひたすらナイフとフォークをチャラつかせるのも誠に味気ない。

一呼吸して辺りを見回すと、「どうかしましたか？」とでも聞きたそうなボーイ達の訝しげな眼差しの一斉射撃を受けて、気の弱い客は直ぐに視線を落としてしまうのである。

メインを平らげる頃に、待望の次の客が入ってきた。マスターとボーイの半分はそちらに回ったので、Nは生クリームのたっぷりかかった無花果のワイン漬のデザートだけは、ゆっくりと美味しく味わうことができた。

雰囲気の良い豪華なレストランでの結構なワインと料理、王侯貴族のような気分を味わって、なおかつお値段はチップ込みで三千円と少して、満足この上ない夜であった。

次の日は早めにホテルをチェックアウトし、万博会場に急いだ。タクシートの運転手に

「万博のどこのゲートに着けるか？」と聞かれ

「プエルト マスセルカ（一番近いゲート）」と答えると

「マスセルカ マスラピド（一番早く）で良いか？」と再び聞く。要するに市内を通過すると交通渋滞で時間がかかるので、遠回りだけれど万博用に建設した新しい橋を渡れば時間が節約できるというのである。

「マスラピド ペロ マスデイネロ（早いけど、金がかかるのだろ）？」と聞くとなやりと笑って「シー」と答えた。

一番近いのはプエルタ デ トリアナと云う市内のはずれにあるゲートで、なるほど道路は空いていてスムーズに到着した。

駐車場が余り空いているので、帰りのタクシーが容易に捕まるか心配になり、飛行機の時間を考えて午後二時半に迎えにくるように運転手に頼んだ。念のため運転手の名刺を貰って必ずくるように何回も頼んだ。彼の名前はアンヘル・フエンテスといい、絶対迎えに来ると確約してくれた。

むせ返るような暑い万博会場を一巡して、ほとんど疲れて二時十分に約束の場所に戻ってきた。この時間帯は客が少ないようで、ゲートの前には沢山のタクシーが客待ちしていた。

この暑さとこの疲れ具合で、朝の運転手との約束を守って二十分も日向で待つのは耐え難く、Nは手近のタクシーに乗って空港へ移動してしまった。朝方固い約束を強いたフエンテス氏には申し訳ないことをしたとNは後悔した。

夕刻マドリードに着いた。ここでも孤独な夕食の時間がやってきた。昨夜のような肩の凝るホテルのレストランは敬遠して、Nは気軽な下町の食堂然とした場所を探索すべく、夕闇迫った街を探索することにした。

夜の八時半といっても街の雰囲気は日本でいえば宵の口といった感じであった。昼間タクシーで通り過ぎた時は気が付かなかったが、いざその積もりで歩いてみると、街路の角という角、路地の奥、バス停の前などにビール、タバコ、レストランの看板やネオンサインがあつて、お食事処を探すには全く苦勞はなかった。が、どの店もガツシリした木製のドアが閉まつていて、内部の様子がわからないので店に入るには相当の勇氣が必要であつた。

勿論、店頭にはメニューが貼つてあり、料理の中身とお値段はそれなりに把握できるのだが、先客が居ない店に入った時の、薄暗い店内で料理の出来上がるのを独りで待つ自分を想像すると、余りいい気持ちはしない。そこで外から内部の様子が判る店を探して歩いた。

そのような店は十軒が十軒とも殆どが立ち席のいわゆるスタンド居酒屋で、勤め人が帰りがけに小魚のフライをおつまみにしてちよつと一杯ひっかけるか、ここで待ち合わせて軽く咽喉を潤し、それから本格的な食事に行こうかといった感じの店ばかりであつた。それらの店内の喧騒と濛々たるタバコの煙は不慣れな旅行者の立ち入るのを阻止するかのよう思えた。

そうこうするうちに、Nは小さなホテルの裏手に、うらぶれた中華料理店を発見した。薄汚れたネオンには漢字で『菜宝館』なる店名が読み取れた。店のドアは開いていたが中は暗くて見えなかった。が、中華料理店なら様子もそこそこ想像できるし、ヨコメシに辟易している胃腸を休めるには好適に思えた。

店の中はかなり広がつたが、案の定客席には人影はなかった。中の暗さに眼が慣れるにつれ、数名の従業員がドアに近いテーブルを囲み、簡単な食事をしている最中だと判った。

彼らはNをみて慌てて食事を切り上げ、奥のテーブルに案内した。Nは異国ではことさらに懐かしさを感じて餃子とチャーハンを注文した。落ち着いた気分になり、余裕をもってビールを飲みながらふと気が付くと、店の奥から中国語で歌うテレサ・テンの声が流れてきた。

黙っているのも気詰まりなので、ニキビ面のウェイターを呼び、

「私は日本人だが君らは台湾人か？」と聞いてみると「ノン」という。

「では香港か？」

「ノン、我々はチノ（中国人）だ」と答えて彼は卑屈な笑いを唇の端に浮かべた。当地では中国人の社会的地位はだいぶ低いのかも知れない。

そのうちにテレサ・テンの歌が聞いたことのあるメロディに変わった。なんとそれは潮来の伊太郎で有名な『潮来笠』のメロディではないか！ 多少の懐かしさも手伝って、

「これはなんていう歌か知っているか？ これは日本の歌だよ」と教えてやるところ、彼は相変わらず薄ら笑いを浮かべたまま

「ノン、これはチノの歌だ」という。

確かに日本のメロディではあるが歌詞は中国語なので反論できずにいた。と、曲が小生のカラオケでの得意曲『柳ヶ瀬ブルース』に変わったではないか！

もう我慢できない。再度くだんのニキビ氏を呼んで

「これは絶対に日本の歌だ」と強硬に主張した。すると敵は別のウェイターを加勢に呼んで来て

「この歌もチノの歌だ」とロ々に言い合い、頷きあっている。

「いやこれは日本の歌だ。『ヤナガセ』というのは日本の地名だ」といって、曲に合わせて歌って見せても、彼らは笑顔こそ引つ込めないが、歌の国籍については一步も譲らず、カウンターのおばさんまでも味方に引き入れ、チノチノといいながら何回も何回も頷きあうのである。

事態がここに窮まっては、Nの拙いスペイン語では彼らを説得できる術もなく、この無知で頑迷なチノを相手にしてNは急に不機嫌になり、以後は黙ってチャーハンを掻きこみ、チップも払わずに店を出たのであった。

翌日のマドリッドでの仕事は順調に終わり、Nは十五時三十分発のBA465便でロンドンに帰ることになった。国際便はすくなくとも二時間前にチェックインが必要なのでNは午後一時に空港に着いて手続きしていると、「この便は機材の到着が遅れ、出発は一時間遅れる見込みです」とのアナウンスである。

国際便なら、しかもスペインならこんなこともあるうと潔く諦め、Nはパスポートコントロールを済ませ、手荷物の検査を受けた後、出国ロビーの免税店を冷やかしていた。

暫くブラブラしてから何気なく出発便のボードを見上げると、なんと午後一時五十分発の、Nの乗るべき便より一時間半も前のBAのロンドン行きがやり遅れていて、出発ゲートは未だ決まっていけないが搭乗予定は十四時二十分であることを発見した。

Nが時計を見るとその搭乗時間にはまだ三十分もあるので、何とかその便に乗ってやろうと思い立った。

Nは一旦通過した出国ロビーを出てBAのカウンターに手続きに行こうとした。手荷物検査の横はなんなくすり抜けたが、パスポートコントロールの口は一方通行で無理に出ようとしたらマシンガンを持った警備の兵隊に呼び止められた。

「セニョール、ここから入国はできないよ」もっともな言い分である。一度パスポートコントロールを経て出国したら、正規の手続きなしに再入国は出来ないのだ。

「いや、それは判っているのだが、外に荷物を忘れたので」
「思わず我ながらうまい理由を考えたものだ。兵士はすぐに事情を理解してくれた。」

「OK, だがここからは出られないが、出発ロビーの奥に従業員専用の出入り口があつてそこからは外に出られる」と教えてくれた。

Nは、混雑し出したロビーをなんとか通りぬけて早速その出口に向かった。狭い階段を下りて事務室に通ずる廊下を道なりに進み、二つ目のドアを開けると、ここでも若いマシンガンの兵士が最後のドアを守っていた。

「忘れ物か？ 早くとってこい」と優しく言われてNはやっとスペインに再入国できた。

BAのカウンターに行き、

「先ほどBAのロンドン行き十五時半の便にチェックインしたが、その前の十三時五十分の便に変えてほしい」とたのんだ。ところが、

「前の便はとくにチェックインはおわっているので無理です」とのつれない返事。

Nはやはりそうかと思つたが

「私は非常に急いでいるのに飛行機が遅れて困っているのです。もし、前の便

に空席があるのならエコノミーでいいから乗せてほしい」とジェスチュアたっぷりに懇願した。

カウンターの女性はNの演技力に哀れを催したのか、「ちよつと待っていなさい」との仰せ。数分後名前を呼ばれたNは首尾よく前の便のチケットを手中にし、予定よりも早くロンドンに帰れたのであった。

その夜、今回の出張で最初に会ったS社のC氏夫妻がホテルまでやってきた。彼はNと生年月日が同じでこんなことは滅多にないと、取引相手の中でも特に仲良くしていた。

ご夫妻と一緒にミュージカル「ミスサイゴン」を観劇、その後イタリア料理を食べ終わったら真夜中を過ぎていた。

Nは翌日の日曜日にアントワープに移動し、月曜日に仕事をこなして最後の宿泊地アムステルダムに到着。翌火曜日に午後四時発のJALに乗れば無事帰国できるところまで漕ぎ着けた。

アムステルダムは町中の屋根瓦の色調が統一されていて、運河沿いに同じ風情の建物がどこまでも続くシットリと落ち着いた古都である。

Nは以前来た時に「夜警」で有名な国立美術館やゴッホ美術館はすでに鑑賞済みなので、明日の午後四時までどうすればもつとも有効に過ごせるかホテルのベッドにあおむけになって考えてみた。

五月の日本であれば桜前線が北上して、今頃は弘前あたりがお花見の時期を迎えている頃だなどと思った瞬間、五月のオランダはチューリップの花盛りのはずだと気が付いた。

「そうだ、チューリップを見に行こう、でもどこへ？」

早速Nはフロントへ電話をいれてみた。

「キューケンホフというチューリップ公園がありますよ。アムステルダム駅前から観光バスが毎日出ています。フロントデスクにパンフレットが用意してあります」との嬉しい情報が返ってきた。

調べて見ると毎年四、五月の二か月にしかオープンしていないチューリップ専門の公園があつて一見の価値がありそうなことが判った。この時期にオランダ

ダにしているなんてなんとラッキーなことだと思った途端、ある問題に気が付いた。

パンフレットによると観光バスのアムス駅の出発が午前十時、駅への帰着時間が午後二時である。東京行きのJALの出発時刻は午後四時で、ご存知のように国際便は少なくとも出発二時間前に空港でチェックインする必要があるのだ。アムス駅からどんなにタクシーを飛ばしても三十分はかかると見なくてはならないから時間的にやや無理がある。それに観光バスが道路の混雑とか何かの理由で帰着が遅れた場合は、飛行機に間に合わなくなる可能性が非常に大きい。

でも全てが順調なら空港へは一時間半前に到着できる。このくらいの遅れはなんとかなるのではないか？ Nはまたホテルのフロントに相談した。

「貴方が確実に日本に帰りたいなら、今度の計画はギブアップすべきです。チューリップは毎年この季節には咲くのですからまたチャンスはありますよ」

髪は薄いがそれなりに人生経験の豊かそうなコンセルジュにそう云われると、Nは全くその通りだと思ふのだが、折角のチャンスをムザムザと逸するのは余りにも無念である。

夕食後、Nは暇に任せてアムス駅前の旅行案内所に向いてみた。夜の八時というのに案内所は超満員で三か所ある窓口はいずれも長蛇の列であった。その夜の宿を探してる若者、レンタカーでのツアーを相談している夫婦、汽車の乗り換え時間をチェックしている紳士など。当地のオランダ語はもとより英、仏、独、そしてベルギー語と、係の女性は苦も無く応対している。まさに国際的インフォメーションセンターである。

ようやくNの番が廻ってきた。

「ウーン、ちよつと厳しいけれどトライしてみる価値はありますよ。この季節に再び来れる保証がないのなら」というのが係のお姉さんの返事だった。

新しい情報としてアムス駅から空港まではタクシーなら三十分はかかるが、ノンストップの特別列車なら十五分でゆくとのこと。

「先ず、貴方の荷物を駅のロッカーに預け、観光が終わったら急いで荷物をとって空港に急げば何とか間に合うと思います。とにかくそのくらいの価値があることは保証します」

といわれてNがその気になったのは、相手が美人だったせいばかりではなか

った。

早速アムス駅構内に入り、空港行きの特急列車の発車時間を調べ、二十分おきに出ていることを知った。時間を節約するために、予め空港までのチケットを買った。荷物を預けるコインロッカーの場所も確かめた。「よし、何とかやってみよう」とNは決心した。あとは明日すごい天気でよい写真が撮れればいいなど思いながらホテルに戻った。

翌朝九時、Nは、ホテルをチェックアウトする前にJALのアムス支店に電話を入れてみた。状況を説明し、重い荷物が邪魔なので今から支店に持ちこんだら、四時発のJAL402便に積み込んでくれるか聞いてみたが、そんなサービスはしていない由。Nは自分の名前を告げ、もしかしたら三十分くらい遅れるかもしれないが、必ず402便に乗るからキャンセルしないで欲しいと頼んだ。しかし先方の答えは

「観光バスに乗ることは時間的に無理があります。402便に乗るための確認はしておきますが、遅れた場合はキャンセルもやむを得ないと覚悟して下さい」とのことであった。

こうなれば誰も当てにするまい。Nはとにかく九時半にアムス駅に到着、昨日確かめたコインロッカーに急いだ。空いているボックスを見付けたが、操作法はオランダ語で書いてあるのでどうやるのかまるで判らない。

近くにある一時荷物預かり所は、係員がインドかパキスタン人らしい上に設備がお粗末で、公認の一時預けかどうか疑わしいのでそこを敬遠して、他の人がコインロッカーを使うのをじっと観察してその通りやってみた。

一回目は器械の指定するコインが無かったので失敗、紙幣をくずしてコインを用意しキーをロックした。ドアの横の小さなスリットからバーコードが記載された紙切れが出てきて、荷物を取り出すときは、この紙切れを同じところに押し込めばよいと推察された。

駅前の観光バス事務所でチケットを買い、勇躍バスに乗り込む。生憎の天候のせいで今のところ乗客はN一人らしい。中年の慣れた感じの運転手とオランダ人形そっくりの真っ赤なほっぺ、金髪で碧い眼のバスガイドが外で客を待っている。ようやく一組のアベックが乗ってきた。バスガイドがNのそばに寄っ

てきて

「貴方ひとりでなくてよかったね」と話しかけてきた。その機会をとらえてNは心配なこと、すなわち、このバスは必ず時間通りにアムス駅に帰れるかどうかを聴いてみた。

彼女は「今日四時の飛行機に乗るの？」と確かめたうえ外で白い息を吐きながらストレッチをしている運転手に相談している様子だ。

「貴方の荷物はそれだけでですか？スキポール空港はチュールリップ公園からアムス駅への途中になるので、帰りがけに送ってあげますよ。そうすれば二時前に空港に着けますよ」との赤いほっぺの有難い仰せであった。

ああ、なんという幸せ、世でいう捨てる神あれば拾う神ありとはこのことか、渡る世間に鬼はなしとはよくいったものだ。Nはこの格言をこれほど実感したことはなかった。

「あと十分でバスが出るからそれまでにロッカーに預けた荷物を取ってきなさい」と言われてNは駅に走ったのは言うまでもない。

アムスの駅は朝よりは余程混んでいた。Nは財布からバーコードの紙切れを取り出し急いで例のスリットに押し込んだ。が、その紙切れはすぐに同じ状態で押し出されてきた。

もう一度押し込む。皺を十分にのばして押し込む。上下を逆さまにして押し込む。Nはあらゆるケースをトライしたが、冷酷な金属製のスリットはNを馬鹿にしたように五センチほどの長さの紙切れを呑みこんでは吐きだし、吸い込んでは無情に拒否して吐きだすのである。

何回も繰り返し返すうちに、くだんの紙切れは段々と柔らかくなり、スリットに入り難くなってきた、念のためロッカー番号をチェックするが、間違いない。

隣のロッカーへリュックを預けにきた若者にどうすれば開くのか聞いてみたが、「ソリー」と一言残して逃げられてしまった。

時間は容赦なく過ぎてゆく。一瞬途方に暮れたが、思いついてこの時間にはもう開いている筈の荷物預かりの事務所にいつてみた。ロッカーの並びのはずれにガラス張りの潇洒なそれはあった。

事情を話すと、窓口の女性は、飲みかけのコーヒーを手にもったまま、ワイアレスの電話に向かってなにか指示し、Nにロッカーに戻るように言った。ロッカーの前には既に制服を着た係官が待っていて、Nのバーコードを調べたあ

と、持っていたワイアレスの電話に何かを報告すると、何もしないのにロッカーの鍵はコトリと開いたのであった。

「このロッカーのキーシステムはドイツ製なのだが故障が多くて…。ドイツ製も質が落ちたもんだ」とその係官はニコリともしないで去って行った。

Nはでっかい荷物を持って大勢の人々をかき分けバスに急いだ。石畳の舗道と市電の線路はトランクについている小さな車には凸凹が激しすぎ、道中の大半は両手に荷物をブラ下げて走るハメになった。額に汗が滲んできたが精神的にはもう心配することはなにもなかった。あとは世界的に有名なオランダのチューリップの大花畑を十分に鑑賞し、堪能すればよいのだ。見上げれば小雨模様のドンヨリと冴えない空が広がっていたが、Nの気分は最高に近かった。

キューケンホフというのが目指すチューリップ公園の名前だ。昔、この地にオーストリアのハプスブルグ家の領地があり、ある伯爵夫人の別荘が建っていたという。その別荘の敷地内に台所用の野菜を栽培し、その周辺に花を植えたのが、公園のはじまりだという。ちなみにクーケンとはドイツ語で台所を、ホフとは建物を意味するのだそうだ。

バスはアムステルダムから運河沿いに西に向かい、ハーレムという街を通過した。乗客のアメリカ人が、

「アメリカのニューヨークにハーレムという街があるけど、なにか関係があるのかしら？」とバスガイドに質問している。

「多分関係があると思います。ニューヨークは昔ニューアムステルダムと呼ばれていたからですから」と優等生の返事が返ってきた。このハーレムとライデンの二つの町の間広い、広いチューリップ畑が展開している。

海岸に近い砂質土壌の平坦な広がり、オランダの誇る、伝統に裏付けられた栽培技術が、トルコで自生していた単なる野の花を、一時期は同重量の金塊に匹敵する価値あるものに仕上げたのだ。

この地域のリッセというところに四月と五月にだけオープンする世界最大のチューリップ公園が、数万株の色とりどりの花々を擁して客を待ち受けていた。

赤、黄色、紫、白といった様々の単色種のほかに、それらの色彩が一枚の花弁に盛られ、散らされ、混ぜ合わされた複雑な文様の花々が絨毯のように広が

り連なっている。この世の中にこんなに美しい所が他にあるだろうか？ とい
うのが何事にも感動しやすいその時のNの率直な感想である。

親切なバスの運転手のお蔭でNは無事時間通りにスキポール空港に着き、余
裕をもって帰国便JAL402便に乗ることができた。

機内で一杯飲みながら振り返ってみると、仕事とはいえ行きがかり上いやい
やヨーロッパに出張したはずなのだが、この一週間はなんとダイナミックな、
なんと充実した旅行だったか、日本にいるよりもずっと中身の濃いそして誠に
得難い経験をさせてもらったことにNは気が付いた。

セヴィリアの万博、マドリードの中華料理、ロンドンのミュージカル、オラ
ンダのチューリップなど、どれもこれも美しい思い出になるだろう。

これこそ本当のゴールデンウィークだ！

この出張をアレンジしたK課長には、奮発して買った高級ウイスキーの一本
を呈示しなければならぬな、とN部長は考えるのであった。(15091字)